
異世界トリップできれば、王道希望です！

横山 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界トリップできれば、王道希望です！

【Nコード】

N3027W

【作者名】

横山 楓

【あらすじ】

帰り道瞬きしたら、「異世界トリップしてもらいます」「家に帰して下さいっ！誘拐犯っ！」神様にトリップお願いされました。友達は、王道好きなんで王道、勇者召喚で。私は外道好きなんで、外道、神様プロデュース。王道はずれ外道異世界トリップしてやるうぜ。男装にチートまではいい、でも確かに勘違いで、学園から嫌われたり、使い魔つけてくれたにまで嫌われたり、事件の容疑者って今までなかっただろうよ！え、これから仲良くなれって？無理だろ！勇者の友達よ訂正します、私は王道だいすきだ！！（＊は挿絵あります）

第一話 「だってそういうものじゃん、異世界トリップって!」 (前書き)

ここでの外道は、王道以外を表しています

意味ちよつと違っただろ、って思う方がいらっしやると思いますが、
大目に見て下さったらうれしいです

第一話 「だってそういうものじゃん、異世界トリップって！」

「えー王道がよくない？」

「いや、いや外道設定でしょ！」

放課後、帰り道、今私は親友の光ひかりと議論をしている

最近私達がファンタジー小説にはまったのだ

光は美少女で性格もよくて何でもできる才色兼備、でもいたずらをしたりちゃんと普通の女の子らしくて軽いオタクで腐女子というところもあって、面白くて人気だ。女の子に。

男の子には、遠目で見ただけの美少女No.1残念な美少女No.1に輝いている

と光の話をしている私は普通です、名前は道朔影みちはしえいです、よろしくお願ひします

「だって女の子の夢だよ！？逆ハーだよ！？勇者召喚でしょ！」

「それをいうなら、外道のチートでしょ！？ギルドでしょ！」

「いやいやだって——」

「でもさ——」

という討論を繰り広げてました

大声で、恥ずかしい奴らです

「あ、じゃあここで」

「んーばいばーい、また明日」

「ばいばーい」

私はこの時普通に帰っていた
いつもと変わらず

そう、いつもと変わらず
歩いて

いつもの道

風景

変わらず

瞬きをして

「え」

周りが真っ白な空間にいて

「ハロー」

美形がいて、いらつとくる挨拶されて

「お、次はこの子なんだー」

「ふーん、普通」

なんかそんな感じがいいいて

「・・・」

こんなときばかり、感が働く自分がにくたらしい
これはあれだよな、私の知識によると

異世界トリップ

の前に「君を手違いで殺しちゃったんで、ほかに世界にトリップし

てもらいます」「的な会話を繰り広げて、トリップ！みたいな感じの

「・・・」

「トリップしてもらいます」

「いやですうー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！今すぐ返して下さい！家に帰る！」

「え、やだトリップもの好きでしょ！外道の」

「それとこれとは、ちがぁー！ー！ー！う！」

「なんでー？外道が好きだから、今までない瞬きでって設定をしたんだけどきにいらなかった？」

なんつで瞬きなんだ！

もうちょつと光がつ！とか時空の歪み！とかあったらどうにとか思ったらそんなことかいっ！そこは王道でいいのに！

「そ、そそそそ、そんな問題じゃないでしょ！帰して下さいっ！このっ人攫い！誘拐犯！」

「ひどっ！誘拐犯って！」

「おゝそのとおりじゃの」

「ははっ誘拐犯！」

「えゝゝゝ！？」

あ、周りから言われた

はっかわいそうだななんて思わないぞ

「だってそういうものじゃん、異世界トリップって！」

認めた

召喚もあるぞ

「いいから、返して下さい!」

「無理!とりあえず、話し合おう!」

「いや!」

「いやつて!!話しあつてよ!」

「なんで!」

「なんでつて!これからについてのためだよ!」

「あ、はい」

「態度変わった!」

ふうちよつと叫び過ぎた

「はい、で何で私なんですか」

「確信付いてきたね、くじ引きだよ」

「・・・え?」

「いや、くじ引きで君と君の友達の光ちゃんに決まってる」

「光がつ!」

「うん、こっちは王道で勇者召喚です」

「理不尽!何で私だけこんなんですか!」

「外道好きだから?」

何で疑問形何だよ・・・

ちなみに今は、テーブルにすわっておかし食べながら話してます、
ギャラリーもいます

いや、私も遠慮したんだよ?でも、オススメだからって言ったからね!?

めっさおいしいよこのやろつ!

「・・・光とも話したんですか?」

「うん」

「了承したんですか？」

「・・・したよ、一応」

「一応？」

「うん、最初はないやがってたんだけど、勇者の仕事したらあつちとこつち行き来できるってのと君もそつち飛ばすって言ったら了承してくれた」

「そうですか・・・っておいっ！」

「えへ 君も条件に入ってるんで、何としても連れて行かなきゃ上司にしかられじゃなかった約束やぶっちゃうんだよね」

「上司にしかられるからつてトリップさせるんかいっ！」

「違う違う、約束破るからだよ！？それにそれだけじゃなくてももと、君もトリップさせるつもりでー光ちゃんが嫌だって言ったら君もいくつて言えばいくんじやないかなーと思つて出したんだよ」

「何そのいく決定な感じ！」

「え、いけないの！？」

「驚くなッ！」

「・・・いくんじやない」

わらうなっ残念な美形

「だって、光も言っただんでしょ？私条件で・・・」

「うん」

「だったら・・・」

「うん、いくしかないよね」

「~~~~っ狙つたでしょう？」

「どうかな」

くっそ！だってうれしいじゃない私を条件にしたつてのは、あれだけど

光が私が行くから行くつて言ってくれたのは

たぶん光は、あつちに帰れないってのが私が行かない理由だったわかっただろうし

それを解決して私と一緒にならって思ってくれたのは

「あ！チートはもちろんくれるんですね」

「疑問系なのに？が付いてなかったね、もちろんあげるよ」

「ありがとうございます、いつごろいくんですか？」

「プロデュースしおわったらね！」

「え、」

「あ、外道なんだから今までのとはかえるよ！何やっても外道っていえば上におるんだよね」

「しらねえよ！？」

「あ、プロデュースで、希望ある？」

「・・・」

めちゃくちゃだな、ふうまあ希望ねえ――

「あ、男装してみたいです！」

「よっしゃ私の勝ちじゃ！」

「くっそゝまた負けたっ！」

「！」

急にギャラリーに徹していた神様が叫んだ（神様いっぱいいるみたいです、どの世界担当とかあるらしい）

「いいぞ、娘！我が^{われ}が最高の男にしてやろっぞ！」

「どちらさんですか！？そして性別はかえなくていいです！」

なんか神さまが言つとほんとに変えられそう

「よし、こちらにこいつ！」

「え、はいっ！」

「よし僕も手伝うよ」

「あいつは、どこじゃっ！」

「あ、僕が呼んでくるよ」

「え、は？ちよつと!？」

「よし、まずはかつらと服を用意して——」

・・・え、何事？

第一話 「だってそういうものじゃん、異世界トリップって!」 (後書き)

読んで下さりありがとうございます

感想やコメントいただけたら嬉しいです!

第二話 「すごく、ポピュラーな顔立ちですしねえ」

私は特にどこかの宗教に入ってるとかじゃなくべつに神様とかを信じていたわけじゃなかった

しかし私の中で物語などの神様像は美しく慈悲深く優しいもしくはすごく傲慢とかだった

しかしこの方たちは

美しい以外どれも当てはまらない

「しかしこのナチュラルな顔立ちをどこまでよく見せるかだな」

「はい、シルビー様もういつそのこと男の娘でいっちゃえばよろしいかと」

「しかしそれじゃあ、男装じゃなくなるじゃん」

「失礼、馬鹿、突込みどころ違うだろ」

何なんだこいつらデリカシーというものがかけてるんですがむしろ存在しておらん

なんだ男の娘って女の子＋男装＋女装ってややこしいわ

「では、娘はどんなのがいいのだ？」

「そうですねー・・・普通にかっこいいレベルが理想ですけど・・・」

「

「「「はあ」「」「」

「溜息!？」

「だめだよ、影ちゃん普通だったら面白くないでしょ」

「面白味もとめてねえですが」

「そうだぞ、いつそのこと最高の男にだな」

「貴方達の基準の最高って一般人には直視もできなそうな人外美形になりますでしょうが」

「何言ってるんですか、顔の造作じゃなくてどれだけ萌えられるかが大事ですよ」

「この変態が」

何なんだこの子供、いや人の夢を壊す神々たちは

「まあ、娘は黙ってプロデュースされとけ」

「そうだよ、影ちゃん」

「あ、かつらと服届きましたー！」

「お、よしどれどれ——」

「あ、これなんかいいんじゃない？」

「あ、これかぶってみてください！」

「・・・」

やべえ、話し通じねえ

そして、服はサイズどうやって知った
思春期の乙女だぞ

「あ、これ似合う！」

「じゃあ、この服合わせれば——」

「おお！いい感じ」

おいおいおいおい何このマネキン状態

「んーしかし最高とは程遠いのう」

ひどいし、自覚してるしっ！

「どっか個性があればそれを生かしたりできるんだけどな」

個性がない顔立ちってか？

「すごく、ポピュラーな顔立ちですしねえ」

さっきからナチュラルやらポピュラーやら平凡って普通って言うって地味に来るからそれ

第二話 「すごく、ポピュラーな顔立ちですしねえ」(後書き)

感想やコメントいただいたらうれしいです！

第三話 「それに魔王退治じゃないよ。魔王との和平の仲介人だよ」

「このかつらで——」

「あ、これもよくないですか?——」

「えーこれでしょ——」

かつらや服をごそごそとあさっている神様たち

（ああ、もったいない! かつらって結構いい値段するのに!）

と貧乏性なことを思いながらまだ神様に荒らされるといふ、毒牙にかかってないかつらや服を見つける

「・・・」

無言でかつらをかぶり、移動式試着室で着替え鏡を見る

「・・・」

（け、結構いけんじゃないこれ?）

と軽くにやけながら鏡を見てみると

「ふん」

うざく笑ってる神様たちが鏡に映る

「えーそう言うのがタイプですかー影ちゃん?」

にやけながら肩を組み変態な神様が頬をつつく

「なっ、別にただちよつといけんじゃないかなーっっておまっただけですが何が!？」

おまっ たつてなんだよー!?!? じーぶーんーっ!!
真っ赤になる私。リアルに恥ずかしい

「大丈夫、大丈夫分かってるから」

素晴らしい美しく微笑んで肩を叩いてくるのがまたうざい

「そうじゃのう・・・この上着をこれに変えて――」

一人まじめに私を着せかえる古風なしゃべり方の神様
あんた最高だよ! はい、あんたとか言ってすんません

「・・・すっ」

鏡に映る自分を見て呆ける

あの後完璧に服のコーディネートから、髪型、をまじめにしていた
三人組

その間鏡を見るのは禁止され、銀髪や紫色のカラコンを準備された
が見て見ぬふりをした。真面目顔の美形ばねえ

「ふっ我の手にかかればこんなものお手のもの・・・」
「いやいや、私のおかげでしょう」

「そこは僕ががんばったから」

「すっごー！ー！え、ちょ、本当に？え、だれこの美形？え、私の平凡顔にまさか銀髪と紫目が！？わぁー！ー！え、な、もう、えー！ー！？」

「だろう？もつとほめたたえろ！」

「天才！最高！本当に神様！」

「神ですからね！」

「ああ、すごい自分で言うのもあれだけど乙ゲーレベル！いやもう素顔みるの怖い！」

「いや、大丈夫超えてる。若手イケメン俳優も目じゃない！」

「わーまつげが白い！え、マスカラ？眉も白い！肌も白い！よっシヤ！」

「魔法で我が変えてやったぞ。メイクだと取れる可能性があるからな！戻そうと思ったら戻るぞ」

「さすがつす！あれ？なんで髪はかつら？」

「ああ、それはいちいちかえるのが面倒じゃったから、かつらなだけじゃ。あっち行くときは魔法にかえるぞ」

「本当ありがとうございます！」

わーもうかつらもつたいたないとか気にしないほど、すごい。真っ白な肌、白銀の髪にまつげや眉、紫の瞳。そして白にのった唯一の温かみのある軽い朱が差すぽってりとした小さい唇。薄いほうが合いそうだが私がぽってり唇なのでしかたがない。しかしその感じがどこか無機質に感じる顔にリアリティがまし、いいアクセントになって美形というより美少年な感じになっている。

改めて言おう。顔の造作を変えなくてもここまでできる貴方達マジ神様！本当に神様！

「わー本当にすっぴん怖い」

「じゃあ、僕たちから異世界に行くためのプレゼントだ。光ちゃん

は保護するように言っただけ「え？」？」

「まっ、神様とあつちの人たちで喋れるんですか！？」

「ああ、うん。あつちには神様と人たちは全員じゃないけど貴族じゃなくても、直接喋りたいと思えばめっさがんばってコネクションを最大限に使えば喋れるし。すごく親しみやすく、尊い存在って感じかな？あつちの人は。お祭りには必ず参加するしね。」

「へーじゃあスモールワールド現象は神様も例外じゃないんですね」「うん」

へーってまて

「え、じゃあ勇者召喚って神様が入ればする必要ないんじゃないんですか？魔王退治。」

「だめなんだよ。そんなふうには、地上のものたちの秩序にかかわるからね。魔王みたいに微妙な厄介事は介入だめなんだよね。あまりにおおきすぎると珍しく許可が出ることがあるけどね。だから人を紹介したんだ。光ちゃんをね」

「ほー」

「それに魔王退治じゃないよ。魔王との和平の仲介人だよ」

「え」

「二人ともツンデレでねー。意地はっちゃって困る、困る。僕が言っても意地で嫌って言うてね」

「そんだけ？そんだけで勇者召喚したんですか！？」

「だから仕事終わったら、こっちとあつち行き来していいって言うたんだよ？かなりラッキーだよ？無料で海外どころか異世界旅行よ？いつでも」

そ、そう聞いたらお得だな・・・

「あ、生活水準ってどんなかんじなんですか？中世ですか？」

「うん。変わらないよ。むしろ地球より便利なものもあるかも。科学が魔術に変わった感じだね。あ、服は変わらないけど、あっち普通に甲冑とか騎士とかローブとか着てるひといるけどね。」

「ほー」

「前はかなりひどい戦争があってね。神が止めるくらい。」

悲しそうに少し遠い目をする

私は深く突っ込まずいつもの調子でいく

「だからかな、今は国ほとんどが同盟を結んでるよ。平和だしね」

「いい感じですねー」

「うん」

「あ、魔術学校通う？」

「・・・え？」

「あ、通わない？通うなら僕が地上で遊ぶ時の名前で保護者するんだけど」

「通いますう！絶対通います！ありがとございますー！」

「じゃあ、入学書かかないと」

ああ、楽しみー初異世界旅行！海外通り越しちゃったぜ！

第三話 「それに魔王退治じゃないよ。魔王との和平の仲介人だよ」 (後書き)

一回書いてサブタイトル書き忘れて消えて本当にへこみました。

感想やコメントくれたら嬉しいです

第四話 「あっちでもがんばってくださいね！遊びに行きますから！毎日！」

10/17少しつけました。

第四話 「あっちでもがんばってくださいね！遊びに行きますから！毎日！」

「ぐずっ・・・あっちで、がんばって、くだっ・・・さい、ね・・・」

「くっ、立派でやるんだぞ！・・・っ」

「本当につ、今まで楽しかったよっ！ああっ」

「何の真似ですかこの野郎」

本当に何なんだこの空気！

はい、取りあえず旅立つ私です。あっちの家から荷物を取り、貯金通帳渡され、家の地図を渡され。

いや貯金はさすがに断わったよ！？でも、トリップさせるのこっちだしそういう責任はとか、そこから生活費、学費はらうんだからとか言われたからね！？まあ、とりあえずもらえたらこっちもうれしいんですよ！事実言ったら！知らない土地だしね。うん。まあ節約しよう、ありえない額が入ってた気がしたけど、現実逃避！

そして、親と弟からは「がんばってきなさいよ！」「たまには帰ってこいよ」などと言う言葉をもらいました。え、何！？これも神様パワー！？と聞いたら『僕の交渉術のうまさだよ！』とかどや顔で言われました

「これは、僕たちからの選別だよ、はい」

「・・・ありがとう、ございます」

渡されたのは三つのネックレス。

「そのひし形のは我のだ」

「ほへーありがとうございます！」

「それで、その四角いのはゼルラ様ので、もうひとつが私のです！」

「ありがとうございます！・・・え？」

「？どうしたんです？」

「ゼルラ様ってどちらさんですか？まあ何となくあの方の気がしますが。流れからして」

まあ、それで違ってたらいやですしね

「ああ！そうだ僕たちの自己紹介忘れてた！」

「ああ、そうじゃった！我は、シエンティじゃ」

「あ、よろしく願います」

「私は、フェルカです！」

「よろしく願います」

「じゃあ、僕は、「ゼルラ様ですね」・・・はい」

自己紹介きずかなかったな、みんな知ってましたし。私の名前

「あ、そう言えばゼルラ様」

「んー？」

「語尾に なくなりましたね」

「あ、忘れちゃった って結構このテンション疲れるんだよ、影ちゃん」

「・・・すいません」

言っちゃだめなんじゃないんですが、そういうの

「じゃあ、そろそろかな」

「・・・はい」

「あつちでもがんばってくださいね！遊びに行きますから！毎日！」

「毎日は遠慮してもらいたいですね」

「我もファッションから髪型までチェックに行くからな！毎日！」

「遠慮して下さい」

「僕も毎日暇つぶしに行くからね!」

「遠慮」

もう、最後には遠慮だけになっちゃたじゃないですが。めんどくさくて。

「じゃあ、いつてきます!」

「うん!」

「がんばってくださいね!」

先に何にも見えないという微妙に怖い扉の中に飛び込む

・がくんっ

(!し、下がないっ!)

「ぎゃ、ぎゃわあああ—————!」

「あ、我からのプレゼントも、一緒に落とすぞおおおおお———!」

—————!」

「ぎゃああ—————いいいい—————!」

まっさかさまに落ちていく私。恥ずかしい叫び声別名奇声を発しながら、半泣き状態で

(あれ、私どこに落ちるの?)

「……」

意外と結構な時間まっさかさまに落ちる間に少し冷静になりましたよ。

結論——

「外道なんて、だいっきらいだああああ——」

第四話 「あっちでもがんばってくださいね！遊びに行きますから！毎日！」

感想やコメントもらえると嬉しいです！

第五話 「……えっと、あの、その、すみません」

「じ、地面！」

地上が！ やつと地上が！

真つ黒なところを落ちてゆくと地上が見えた雲とかすつ飛ばしてそれは気にしないことにして、問題が

(私このままだと、・・・転落死。・・・え?)

「まあーじいーでえーああああー！死ぬうー」

本当に死ぬ

（え、神様、何かしらしてくれてるよね！？本当にしてるよね！？）

いやまあ、どっちにしろ怖い。ジェットコースター目じゃありません

(あ、あと十秒ある？な、ないないない、え、ほんとに？)

地面がちかずく

「ひつ・・・つ！」

喉からか細い声が出て、眼をつぶる

え

体がはねた。そう、はねた

「な、ぎゃ、ぎゃあああああ——————！！」
「うわっ！」

急に、トランポリンに乗ったように。いやもしかしたら乗ってるのかもしれない、見えませんが

「ひい！は、はねる————！ははは、やく、っとまれえええっ
！」

もう、本当に涙目になりながら、ポン、ポン、はねて、どんどん跳ねも、低くなり、やっと止まる

「はあ、はあ、ちよっ、まじではあ、し、はあ、死ぬかと、思った
っ、はあ、——ぎよわっ！」

そして、地面から十センチほど浮いてるところを、急に地面に落ちる

（な、私、頭の隅で地面ぎりぎりであわっとなつて、みたいなことを考えてただけだねっ！？外道！？外道のせいか！？）

「そこは王道森か！」

何でそんなとこだけなんですか！？悪意あるでしょう、ねえ！？
見たところ、夜。ここだけ広場のように、開いており芝生が生えている

そして、周りは木、木、木——猫、木、木、はい、はい、はい、
は？

えっと、森に野生の猫っていますか？迷子？うん、異世界なんです
よ、いる、いる。わーかわいい、H A H A H A

「どっち、いこう」

「こっちです」

「あ、そっちですか？ありがとうございます」

「・・・」

「て、おいしいiiiiiiii！どちらさんですか！？」

「シェンティ様から使われました、レイルです」

「・・・あ、ああ。えっと、道朔影です。よろしくお願いします」

「では、こちらです」

このレイルさんがプレゼント？え、まあ私の考えでは喋る猫イコー
ルなんか獣人みたいな感じなんだろう、たぶん。あ、でもシェン
ティ様からか・・・神獣かもしれないな・・・

あ、フィズの森広場って看板が・・・

（・・・気まずいな）

レイルさん、貴方私のこと嫌いでしょう？嫌いというか、私のここ
ろにきたの納得してなくて、ちょっと私に友好的じゃないというか、
もともとかもしれないが。取りあえず、今森を歩く雰囲気はよくは
ない

（喋りかけるのもかけられるのもある意味きまずいけど、この無言
も・・・）

「ここは、フィズ町です」

「へえ！？あ、はい・・・」

思わずな返事をしながら、町を見る

（わ、なんか・・・）

洋風な建物。どこか外国のような・・・なんか想像どう・・・つごほん！じゃない、うんなんかこう、異世界！みたいな感じは漂いますよ、うん。

（感動・・・というか、かわいい！写真、写真！）

一人で、地味にはしゃぎながら写真を撮っていると、ハッとレイルさんのことを思い出す

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・えっと、あの、その、すみません」

「もう、よろしいですか」

「あ、はい・・・すみません」

猫なのに！猫なのに、冷めた目してたよ！あれ、顔が熱い

すんごい恥ずかしい。猫相手に恥ずかしい思いしたの、初めてだわ・

・

第五話 「・・・えっと、あの、その、すみません」(後書き)

感想やコメント下さると嬉しいです！

第六話 「宿は空いていますか？」

「もう遅いので、きょうはこの街の宿に泊まりましょう」
「あ、はい」

猫に引つ張られるつてもどうかとは思うが、はっきり言えば安心した。

凍えそうな視線でも、馬鹿を見るような視線でも！

「私は人前では普通の猫ですので」

「あ、わかりました」

「ここです」

（はる、なぜ？・・・しゅんぷう？ぱつと見て覚えればいいか）

馬鹿じゃありません。ただ、どっちか悩んでるだけであって――

「春風亭しゅんぷうていですよ」

「っ・・・はいっ」

やばい、恥ずい、あれ猫。どうしよう私。

猫にあんな目で見られたらもうだめでしょう、ねえ！？

「入らないんです？」

「今行きます・・・」

・カラン、カランッ

ドアを開けると、鈴の音になる。

「いらつしゃいませー！」

店員の声が出迎える。

やはり、酒屋と宿は一緒になってるらしい。
ちよつとわくわくしてきたぞ・・・。

「えつと・・・」

（・・・あれ、泊まるのってなんて言えばいいの？「宿は空いてますか？」かなやっぱり・・・）

と、地味で小さくかなりの疑問が脳裏をよぎるがさらつと行こう。
さらつとだ自分。スマートに！

「やど・・・ん？」

店員の女性がこちらを向き硬直している。よく見れば何人かの飲んでいた客も。

（あ、そっか、プロデュースされたんだった）

心なしか少し赤い店員の女性の頬。

（・・・あれ、なんか・・・）

「・・・えらい美少年の子だな——」
「綺麗・・・」

（え、ちょ・・・）

「あ、す、すいません！」

店員さんがしどろもどろになりながら謝る。

（ちょっと、うれしいぞこの感じ！）

まさか私が、綺麗やらかっこいいやら美少年やら囁かれるなど・・・

（え、な、ちょ、うれしい！や、ほんと、）

私も普通の人なんで、やっぱりそう言われると嬉しい。
プロデュースだろうがなんだろうが一応私なので嬉しい。

（まあ、戻ったら一発で終わるんだが）

ささやかな夢気分だ。そのぐらいはいいだろう。

「宿は空いていますか？」

「あ、はい！そ、そちらの猫も？」

「はい。大丈夫ですか？」

「ええ、もちろん。では、料金のほうは、そちらの猫5メイも合わせて55メイになります」

「えっと・・・」

お金は通帳以外にも家族がくれたおこずかいをこちらのお金に神様たちが変えてくれました。

あとは、言葉と文字翻訳機能。

そして、神様解説のこちらの世界のいろいろな事が乗った本『異世界旅行記』と言うなんのひねりもないタイトル、そして作ゼルダ様というどこもない子の不安感。じゃない、を見ながらお金を出す。

（えっと、銀貨を5枚と・・・半銀貨1枚と）

「ちょうどですね、では、お部屋へご案内します」

落ち着いた店員さんの案内で部屋に向かう。

「では、何かあったら店員に声をかけてくださいね」

「はい、ありがとうございます」

ベッドに簡単な机など普通のビジネスホテルのようだ。

「みちはじ道朔さま」

「はい？」

「こちら私の分です」

ポンッと眼の前に半銀貨が現れる。

「あ、はい・・・」

（別によかったんだけど・・・500円だし・・・）

一応レイルさんがいる手前、ベッドにダイブはさけておき普通に座る。

（・・・疲れた・・・）

半端ない。精神的疲労ハンパネエ・・・。

（あ、なんか一気に疲れてきた・・・。眠い・・・。お風呂朝にしよう）

そして、なけなしの気力で着替えレイラさんに挨拶を言い眠りについた。

第六話 「宿は空いていますか？」（後書き）

1メイ・・・1000円ぐらいです。

銅貨・・・1メイ（100円）

半銀貨・・・5メイ（500円）

銀貨・・・10メイ（1000円）

白銀貨・・・100メイ（1万円）

半金貨・・・500メイ（5万円）

金貨・・・1000メイ（10万円）

みたいな感じです。

明日も更新する予定です。

第七話 「中、中入りましょう！」（*挿絵あり）（前書き）

*挿絵注意です！

第七話 「中、中入りましょう！」（*挿絵あり）

「ルーディア王国セレーン学園ですか？」

「はい」

朝、まだ出るのには早いころに店員さんに質問をする。

「でしたら、馬車を使ったほうがいいですよ、そこそこ遠いので城下まで言つて、歩いたほうがいいですね」

「ありがとうございます」

そしてフードを目深にかぶり、宿を出た。

「・・・」

「・・・」

気まずい。気まずい。

どうしよう、ほんとにレイルさん必要最低限しか喋ってくんない。

（というか、全然揺れないな・・・）

私的には揺れが激しいイメージだったんだが、音はするけど揺れない。

「・・・」
「・・・」

ほんと、もう寝ようかな！うん、寝よう！

「・・・」
「・・・」

寝れねーよ！急に寝れないんですけどね！
ということを考えていると――

「！」

「つきましたよ、お客さん」

「あ、はい」

耐えた、私。すごいがんばった。
代金を払い、外に出る。

「すごい、人！」

人、人、人。市場や店、人でごった返し、賑わっている。

（わーすごい！初めてこんなに人見た・・・）

すごい、やばい。楽しそう。

「こちらです」
「え、あ、はい」

人ごみの中をレイルさんへついていった。
そして少し通りを抜けたところに行く。

（ここらへんは、一気に人がいないな……。フードも脱ぐか・・・）

先ほどはお店などだったが、此方は住宅が多い。

「ここが、住む家です」

「ここが、」

> i 3 7 8 4 9 — 3 4 9 2 <

ポツンと佇んだレトロでレンガづくりの家。

一人と猫には大きすぎるが――

（え、本当にいいの！？この家？可愛い！レトロ！いいの！？こんな家すんじゃっていいの！？）

少し伸びた鳶も雰囲気を出してるし、レトロなランプも玄関口についている。

それに近所の家との距離もそこそ開いている。

「ちょ、本当にここですよね！？」

「はい」

「きゃー！」

興奮して顔が熱くなる。

「中、中入りましょう！」

ああ、キッチンお洒落、二階建て、お風呂トイレ別、部屋も結構ある！

「わーもう、最高、すごい！ってあ、名前書いてある」

少々冷静になり、ゆっくり見ると、家に入ってすぐのところの部屋に影と書かれたネームプレートがかけてある部屋を見つける。

（私の部屋？神様たちかしら）

扉を開けると、テレビ、ベッド等、の家具がそろっており机の上の手紙を見なかったことにする。

（・・・テレビあるんだ・・・）

とか、思いながらクローゼットを開けてみる。

「・・・」

ゆっくりと閉める。

「・・・」

そしてまたちらつと見る。

「・・・？」

あれ、これって・・・

（え、衣裳部屋！？なんか洋服いっぱいあるよ！？かつらもあるん

ですけど!?)

はい、男物ー。ざっと見る限り、男物ー。
嬉しいけど、なんか胸に来る気遣いー!

(なんか、ここまでしてもらっちゃ怖いな、逆に)

失礼だが、ちょっとね? いや、嬉しいんだよ!? そっちのほうで勝
ってるんだけどね!?
だけど――

(あとから、厄介事頼まれそうだな・・・――)

まあ、取りあえず他の部屋も見よう。

そして回った結果、お風呂とトイレが二つありました。なんか嬉しい
よね。

あと、客室がありました。そんなのがある家初めて見たよ。

(あ、一応お金おろそうかな少し)

ベッドや机などはあったが、食材は買わなければいけない。

(料理・・・レシピ本も買おう)

レイルさんとも親交を深めよう。

(レイルさんの部屋・・・扉だけ見たけど、猫用扉がついてたな・・・)

はたして、人間になるのだろうか？かなり気になる。

(手紙も一応みとかないとな・・・)

親にも連絡はしないと。

「よっし！」

少し気合を入れ、そして街へと行く準備を始めた――

第七話 「中、中入りましょう！」（*挿絵あり）（後書き）

感想やコメントもらえると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3027w/>

異世界トリップできれば、王道希望です！

2011年12月29日01時45分発行